

お袋は、どこに消えたのだろう。
お袋は、このような不思議な消え方をするために、八十数年を
生きてきたのだろうか……。

血脈の火



1996年 新潮社

「Story

愛媛県南宇和から大阪へ家族で再び戻ってきた熊吾は、中之島の端建蔵橋近くに居を構え、中華料理店と麻雀屋をはじめ。持ち前の事業の才覚を活かし、次々と新規事業に手を染め成功を遂げる一方、「きんつば」「カレーうどん」といった庶民的な食べ物屋も始める熊吾。一方、四国に住む母と妹一家は大阪へ出てきたが、母が「愛媛へ帰りたい」と言って行方不明となってしまう。次々と事件や騒動の起こる中、熊仁は小学生となり、大阪という都会のなかでも伸び伸びと育てゆく。

『流転の海』シリーズ

『流転の海』シリーズは、宮本氏のライフワークとなる長編連作である。宮本氏の父、母、そして自分自身をモデルとしているといわれ、物語は主人公の熊吾に関わる個性的な人達を中心に、終戦直後の混乱の中、必死にもがき生きてきた人々の生きざまを描く。舞台は、時代が進むにつれ、故郷の愛媛、新天地を目指して移住した富山、そして再び大阪へと変遷すると同時に、父を中心に描かれる世界から、息子の目を通した物語へと変遷してゆく。

『流転の海』(流転の海 第一部) 福武書店1984年7月・新潮社1992年11月
『地の星』(流転の海 第二部) 新潮社1992年11月 / 『血脈の火』(流転の海 第三部) 新潮社1996年9月
『天の夜曲』(流転の海 第四部) 新潮社2002年6月 / 『花の回廊』(流転の海 第五部) 新潮社2007年7月
『慈雨の音』(流転の海 第六部) 新潮社2011年8月 / 『満月の道』(流転の海 第七部) 新潮社2014年4月
現在、「新潮」(新潮社)にて、第八部である『長流の畔』が連載中。(2014年10月現在)



不思議な巡り逢わせ

熊吾の生き方は、一見乱暴に見えるけれど、
本当は繊細で緻密であり、また、彼を取巻く
人たちの不思議な巡り逢わせすべてが、
前向きにまわってゆく。類は友を呼ぶというが、
熊吾の魅力が、彼を盛り上げる人々を磁石
のようにひきつけているように思う。

Review